

2016 年度第 1 回阪神地区研究会
グループごとの発表内容について（詳細）

A グループ

- ・ 講演の「自分の言葉で話しかける」という点が印象に残った。

1. 事例

- ・ 各大学、オリエンテーションでは専門用語を使わずに分かりやすく説明している。
- ・ 学生の理解を見ながら検索のスピードを調節して実施している。
- ・ 全体のレベルを上げる取り組みとして、ペアを組んで教え合い、シナリオどおりではなく自分の言葉で説明する等のやり方を見つけ、工夫している。
- ・ オリエンテーション時にはスタッフ同士で評価をするが、実際やってみた時の学生の反応も気を付けて見ている。

2. 課題解決への取り組み・工夫等

- ・ 学生に合わせて臨機応変に実施できるようになりたい。

B グループ

1. 事例

- ・ 図書館のサービスを知り、来てもらうために、学生相談室で相談者に応じた図書館でのサービスを記したカードを渡してもらい、案内している。

2. 課題

- ・ 学修支援と言っても図書館に来てもらわないと始まらない部分もあるため、まず図書館に来ない人に来てもらうにはどうすればいいか。
- ・ 教務課と連携し新入生オリエンテーションを実施しているが、100 人単位での実施となると利用者の特性に合わせる事が難しい。

3. 課題解決への取り組み・工夫等

- ・ 時間を割いてでも、特性にあったグループに分け、利用者合った役立つ情報を提供することで来館者が増えるのではないか。
- ・ オリエンテーション内容を一律にする必要がある場合は、次のレベルについての案内をすることで次に繋がるのではないか。
- ・ 教員も出席する図書館委員会のような場や、自己点検等で学生が図書館に求めている事を聞き、次のサービスの参考にするのもいいのではないか。

2016年度第1回阪神地区研究会 グループごとの発表内容について（詳細）

- ・ 図書館に継続的に来てもらうために、スタンプラリーを実施し、除籍したCD等の資料や、図書カードをプレゼントしたり、貸出期間を延長したりする仕掛けができるのではないかな。

C グループ

1. 事例

- ・ 各大学、学修支援の取り組みとして、利用ガイダンス・図書館ツアー・文献探索講習会等を行っている。一方的に話すのではなく、課題解決型のグループワーク形式で行っている大学もあった。課題解決型で実施することで、学生の理解度を把握でき、図書館側の改善にも繋がる。

2. 課題

- ・ 基本的な図書館の実務は派遣・委託が行っているが、学修支援を行うにあたり、委託の方との意思疎通も必要となる。そのことについて話し合った。

3. 課題解決への取り組み・工夫等

- ・ 委託の方と個別に話すのは難しい状況もあるため、委託リーダーに対してこちらから考え・目的を話すようにしている。
- ・ 利用者に対してプレゼンテーションを行うという点は職員も委託も目的・対象が同じであるため、プレゼンテーション力は重要。最終的に学生への学修支援にも繋がっていく。

D グループ

1. 事例

- ・ 対象が1年生かゼミかということで内容は異なるが、1年生に対しては、図書館は便利なところだという印象付けるため、ミッションを与えチェックポイントをゴールにするゲーム形式で行っている。体験型だと学生も楽しんで参加し、図書館に来るきっかけ作りにもなる。
- ・ プレゼンテーションにおいて、説明をする側も受ける側もアクティブな参加型であることが今後の図書館の利用に繋がる。

2016 年度第 1 回阪神地区研究会
グループごとの発表内容について（詳細）

2. 課題

- ・ 講演の中で導入部分とまとめ部分が大切だという話があった。自学ではまとめにチェックシートを使っているが時間が足りず機能していない。

3. 課題解決への取り組み・工夫等

- ・ ワークシートを使っている大学は、学生が学んだことを実感できる形に持っていくまとめも大事。

E グループ

1. 課題

- ・ 各大学、ガイダンス・ライブラリーツアーで学生の個人差をどう埋めるかを悩んでいるという意見が多かった。
- ・ 委託と職員の間で、ガイダンス・ライブラリーツアーの企画を立てる際の線引きが難しい。

2. 課題解決への取り組み・工夫等

- ・ ガイダンス担当者と委託のリーダーの間でミーティングを持ち、プログラムを作成すればよいのでは、という意見があった。
- ・ 各館で問題等があるが、講演内容を受け、自分の言葉でどのようなことを学生に伝えるかが一番大事だと再認識できた。各館に持ち帰り、ガイダンスにどう活かすか検討する。
- ・ 各大学の特色あるガイダンスの取り組みについて話を聞くことができ、有意義だった。

F グループ

1. 事例

- ・ 自由参加型の講習会では利用者が集まらないが、教員の協力を得、講義の出席ポイントにしたり、教員からの課題を図書館で調べるよう伝えてもらったりすることで利用の増加が期待できる。教員との連携も大切。
- ・ ガイダンスのために 10 問ほどのクイズを無料アプリで作成し、活用している。

2016年度第1回阪神地区研究会 グループごとの発表内容について（詳細）

2. 課題

- ・ 教員からの申込みで実施する新入生オリエンテーションは4月から始めているが、順番の都合で7月と遅くなってしまう場合、その頃には既に図書館の利用についてよく知っている学生もいる。求められている内容が変わってくるため、内容を柔軟に変更、工夫していく必要がある。

3. 課題解決への取り組み・工夫等

- ・ 今回の講演を聞き、改善するのは難しいが、パワーポイントを読まないという点は勉強になった。
- ・ パワーポイントは重要な点を箇条書きにし、それを見ながら自分の言葉で話すと、棒読みにならない。
- ・ 発表者も座り、パワーポイントを流すだけでは学生も寝てしまうため、「図書館に来たことありますか」「貸出冊数を知っていますか」等学生に問いかけ、答えてもらおうと学生の理解度も分かり、一石二鳥ではないか。
- ・ 講演中の「俺の物は俺の物、お前の物も俺の物」という自己中心的の象徴の言葉を高野講師がポジティブな例として使われていたことが興味深く、プレゼンテーションの中で、キーを使うと印象が残り、良いということを実感した。

G グループ

1. 課題

- ・ 新入生オリエンテーションでは学生の理解度・理解力に差が出てしまうので、レベルをどこに設定すれば全員が納得できる内容となるのか。
- ・ 新入生オリエンテーションを30～40人規模で行うと、対話ではなく一方的に話しているだけになるので、受ける側はつまらないという印象が強くなってしまう。

2. 課題解決への取り組み・工夫等

- ・ 各大学ともオリエンテーションの台本があったが、台本を使い機械的に説明を行うと学生は「眠い」「おもしろくない」となり、中には教員もイヤイヤ受けていることがあったため、台本はあってもいいが、自分がどういう思いで伝え、どこが重要なのか、という点を大事にして来年のオリエンテーションに繋げたい。
- ・ 一人一人に対話できれば良いが、時間的に難しい。今後改善していきたい。

2016 年度第 1 回阪神地区研究会
グループごとの発表内容について（詳細）

H グループ

1. 事例

- ・ 学生に話を聞かせ、パワーポイントを見せるという方法ではなく、問題を解かないと本には辿り着けないという課題解決型、大学のキャラクターの着ぐるみを着て検索をし、書架で本を見つけるまでの様子をスライドで作成する等の工夫をしている大学があった。しかし、いずれもアンケート等で（時間が）「長い」との意見が出て、学生の集中力は続いている。
- ・ ゼミ等からの完全オーダーメイドに応え、その都度教員からの要望に応じたガイダンス等を実施している。検索方法等、図書館が知ってほしいことを一方的に説明するのではなく、授業としての到達点、目標があり、学生と共有できている。

2. 課題

- ・ 新生生オリエンテーション・ガイダンスについて、学生の集中力が続かないという現状がある。

3. 課題解決への取り組み・工夫等

- ・ 医学系、薬学系は文献収集の際、相互利用の文献複写にかなりの金額をかけているが、無料で文献を入手できる方法もあるということなど、学生にとって「これは聞くに値する」というメリットのある情報や、図書館で聞かなければ知り得ない情報もあるのではないかな。
- ・ 目標、到達点を学生と共有し、一緒に目標に向かっていくためには、職員が教員からのオーダーに応えられる力を保持する必要がある。
- ・ 講演中にあった FD・SD に積極的に参加し、教員がどのような授業を行っているかを知る。
- ・ 授業支援で授業 1 コマを図書館で請け負うという形を取ったとき、15 コマのうち 1 コマを使っているということを考えながら実施する。
- ・ 闇雲に「支援しなければ」と思うのではなく、バランスよく、そしてオーダーメイドで「いつでも請け負えます」という形を取れるよう、図書館職員も切磋琢磨しなければならない。